

仲間よ生き延びて 祈りの詩

ウクライナの障害者へ 日本から届いた

「とにかく生き延びて」。ロシアによる侵攻が続くウクライナの障害者への祈りを込め、日本から発信した詩が、日本とウクライナの障害者を結んだ。詩はウクライナ語などに訳されており、爆撃を受けた街にいる障害者らから感謝の声が届いている。

詩のタイトルは「連帯と祈り ウクライナの障害者のある同胞へ」。作者は日本障害者協議会（JD）代表で、視覚障害のある藤井克徳さん（72）だ。「苦境にあるだろう障害者を思うと心が痛み、いてもたってもいられず、できることはないかと考えました。障害者の立場から声を上げ、とにかく自分の身を守ってほしいと伝えようと思った」

危機感募って

テレビで流れる映像を周囲の人に説明してもらう限り、国境を越えて逃れる人の中に、車いすや白杖の使用など障害者と思われる人は確認できない。ラジオニュースでも「障害者」という言葉を聞くことはなかった。欧州障害フォーラムによると、ウクライ

ナの障害者は270万人。藤井さんは危機感を募らせた。約2時間で詩を書き上げたのは3月6日。詩にしたのは、短い言葉で力を放つと思っただけだ。ウクライナ語、ロシア語、英語への翻訳を知人に頼み、日本語を含めた4カ国語の詩をJDのホームページやSNSで発信すると、フランス語とドイツ語への翻訳の申し出があった。さらにスペイン語の翻訳も知人に依頼した。一部の訳はウクライナ大使館にも郵送した。現地にも直接詩を届ける手立ても模索した。藤井さんが関わる障害者支援の全国組織「きょうされん」で常務理事を務める赤松英知さん（56）が、欧州の障害者団体から情報提供を受け、「ウクライナ障害者国民会議」を知った。詩を添えたメールを同会議に送ると、キーウ（キエフ）に

ある事務局のラリーサ・バイダさんから返信があった。「ハルキウにいる視覚障害のある弁護士から電話がありました。日本の団体から手紙が来たことを伝え、詩を読み上げました。彼は、貴団体が私たちとともにあることに感動していました」。そして、ウクライナ語、ロシア語、英語の詩が同会議のホームページに掲載された。

泣き出す人も

朝日新聞の取材に対し、バイダさんは「（加盟団体との会議で）詩を読むと、多くの仲間が泣き出しました。ある者は殺されてしまった人たちを、またある者はもう存在しない自分たちの家を思い出したからです。詩は、日本の障害者が私たちの痛みを感じ、寄り添ってくれていることをはつきりわからせてくれました」。脱出できない街の人には「心の中から希望が切り離されないように」などと詩の

フレーズを引用し、伝えた。「日本の作詩者が心配してくれていますよ」と。

藤井さんは「日本からの祈りが、危険に直面している障害者らの希望の支えになるよう拡散してほしい」と話す。

（森本美紀）



砲撃と爆撃の下で地下に避難している障害者ら
＝3月、ウクライナ、ラリーサ・バイダさん提供

連帯と祈り ウクライナの障害者のある同胞へ

戦争は、障害者を邪魔ものにする
戦争は、障害者を置き去りにする
戦争は、優生思想をかきたてる
大量の障害者をつくり出す最大の悪、それが戦争

朝一番のニュースを恐る恐る
キエフの包囲網がまた狭まった
教会も文化財も悲鳴を上げて崩れ落ちる
禁じ手が反古にされ原子力発電所から火の手

殺し合いでなく話し合いを
侵攻でなく停戦を
停戦でなく平和を
青い空と黄色の豊作に似合うのは平和

私たちは祈ります
西北西の方角をじっとみつめながら
心の中から希望が切り離されないように
とにかく生き延びてほしい

戦争は、障害をたちどころに重くする
戦争は、障害者の尊厳を軽々と奪い去る
戦争は、障害者の明日を真っ黒に塗りたくる
早いうちに、否、この瞬間に終わらせなければ

もう一度くり返す
とにかく生き延びてほしい
たとえ、食べ物盗んでも
たとえ、敵兵に救いを乞うてでも
遠い遠い、でも魂はすぐ傍の日本より

ふじいかつり（NPO法人日本障害者協議会）
※詩は日本障害者協議会のホームページなどに掲載

朝日新聞 2022年4月5日
承諾番号：22-1566

※本記事を朝日新聞社の許可なく無断で転載することを禁じます